

第2部 景観マスタープラン編

1 羽曳野市の景観の成り立ち

羽曳野市が歩んできた歴史のなかで育まれてきた文化や羽曳野市固有の豊かな自然、そして、そのうに都市や市街地がつくり出され、現在の羽曳野市の景観が形成されてきました。

ここでは、この「歴史・文化」「自然」「都市・市街地」の3つの視点から羽曳野市の景観の成り立ちを整理していきます。

(1) 歴史・文化

① 歴史的背景

旧石器時代～縄文時代～弥生時代

石川流域の丘陵地帯に人が住み始めたのは、今からおよそ2万年前の後期旧石器時代です。二上山から掘り出されるサヌカイトで作った石器を使って、生活を営んでいました。翠鳥園遺跡からは約2万点に及ぶ石器が出土し、また今池遺跡や株山遺跡など二上山北麓地域でたくさんのサヌカイトが発見されています。

本市では、縄文時代や弥生時代の集落跡も発見されており、弥生時代の遺跡である喜志遺跡は、弥生時代中期に栄えた大きなムラの跡で、サヌカイトを使った石器を多量に生産していました。西浦小学校からは、ムラのまつりで使われたと考えられる銅鐸が発見されています。弥生時代後期になると、勢力争いの多い社会情勢のため石川の東の丘陵地帯に駒ヶ谷遺跡や御嶺山遺跡などの高地性集落が作られています。このように、この地域は古くから生活の場として適していたことがうかがえます。

古墳時代～平安時代～鎌倉時代

古墳時代には、本市及び隣接する藤井寺市にまたがる地域に古墳群が築造され、奈良盆地や大阪平野に本拠を置く支配者の重要な勢力基盤でした。東西4km、南北4kmの範囲に、墳丘長425mで、我が国第2位の規模を誇る応神天皇陵古墳をはじめ、墳丘長290mの仲姫皇后陵古墳（藤井寺市域）、墳丘長242mの仲哀天皇陵古墳（藤井寺市域）、墳丘長225mの墓山古墳、墳丘長200mの日本武尊白鳥陵古墳など、44基の古墳が現存しており、これらは「古市古墳群」として位置付けられています。また、その他にも、市域西部の松原市との境界には墳丘長335mの大塚山古墳、市域東部の飛鳥地区には、古墳時代の終末期古墳として国史跡に指定されている観音塚古墳なども位置するなど、市域各所に数多くの古墳がみられます。

大和と難波の津を結ぶ官道（のちの竹内街道）が整備され、朝鮮半島や大陸にも通じる政治・経済的な交通の要衝でもありました。このため、朝鮮半島から多くの人々が渡来し、壮大な伽藍をもつ野中寺や



翠鳥園遺跡公園



喜志遺跡



応神天皇陵古墳



墓山古墳



日本武尊白鳥陵古墳



仲哀天皇陵古墳（藤井寺市域）

西琳寺などの多くの寺院が造営されました。

平安時代になると律令に基づく公地公民制が解体し、各地に荘園が成立します。本市域でも観心寺領の古市荘や西琳寺領の高木荘、西大寺領の壺井荘などの名が記録に残っています。古市荘が設けられた古市周辺は、平安・鎌倉時代には東西道である竹内街道と南北に通じる東高野街道が交差する交通の要所として栄え、早くから町場的空間が広がっていたと推測されています。13世紀後半には、僧叡尊が奈良西大寺の末寺として西琳寺を復興し、高屋城のあたりに奥院を建てました。現在、西琳寺境内にある巨大な五輪塔は、この奥院に建てられていたものです。

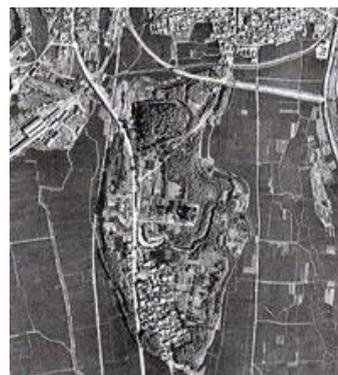
平安時代の後半、源頼信が河内の国司に任ぜられ、河内源氏として壺井の里に館を構えました。その子頼義は、通法寺や壺井八幡宮を造営、孫の義家は、八幡太郎として天下に武名をとどろかせました。後に鎌倉に幕府を開いた頼朝は、この河内源氏の子孫です。



通法寺跡



東高野街道（壺井八幡宮付近）



空から見た高屋城（昭和23年頃）

南北朝時代～室町時代～戦国時代～江戸時代

鎌倉幕府が滅び、南北朝時代に入ると、羽曳野近辺は、楠木一族の活躍の舞台となりました。応仁の乱の一因である、畠山氏の家督争いにより、市内でも古市や誉田などで多くの合戦が繰り広げられたことが文献史料に見られます。河内守護畠山氏の居城にもなった古市の高屋城が河内の随一の城郭として度重なる戦いの舞台になりました。

一方、当時の生活を知る貴重な遺跡である古市遺跡は高屋城と接した位置にあり、街道を利用した商工業が発展し、城下町的な役割があったと考えられています。さらに茶山遺跡では、通常の集落遺跡では見られない園池状遺構や茶道具などが出土しており、文献に登場する誉田城ではないかと考えられています。

やがて、豊臣秀吉の支配下に入った羽曳野近辺では、太閤検地が実施されています。当時は、古市郡の14カ村、丹南郡の12カ村、丹北郡の2カ村の計28カ村の村々がありました。

元和元年（1615）の大坂夏の陣では、柏原市・藤井寺市・羽曳野市にまたがる一帯（本市域では北方一帯）において道明寺の戦いが繰り広げられました。大坂方の先発隊である薄田兼相（通称：隼人正）らが陣を置いた誉田八幡宮境内には、誉田林古戦場の碑が建てられており、また、この戦いで討死した薄田兼相の墓は誉田史跡公園（誉田7丁目）として整備されています。また、後発隊の真田幸村も野々上・野中に布陣し、伊達政宗らの軍と戦いました。



古市の銀屋両替商・銀屋（現存しない）



誉田八幡宮（誉田林古戦場の碑）

江戸時代に入ると、幕府の領地である天領、各地の大名の領地、將軍直属の家臣で旗本の領地など、細かく分けられ支配されていました。大坂や堺などの商業のまちとは、竹内街道や川船の行き来する石川、大和川によって結び付けられ、交通の要地として重要な位置を占めていました。江戸時代半ば以降には、竹内街道と東高野街道の交差点である古市に、河内木綿などを運んで石川を上下する剣先舟の渡船場が設けられていました。水陸の交通の要衝となった古市は、交易地としても栄え、また、代官所が置かれ両替商ができるなど、その繁栄ぶりは、南河内でも群を抜いていたといわれています。

大都市大坂の近郊に位置していることから、そこで消費される農作物の生産も盛んで、ため池や用水を整備して新田開発が進められ、米や野菜が作られました。また、特産の河内木綿の栽培にも力がいれられ、大坂を経て各地へ流通していました。

明治時代～大正時代～昭和時代

江戸幕府が滅び、明治 22 年には羽曳野市域の各村落が統合され、高鷲村・丹比村・埴生村・古市村・西浦村・駒ヶ谷村が誕生しました。

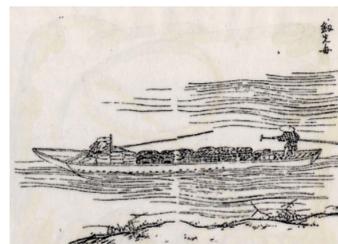
19 世紀末の駒ヶ谷では日よけのために家の付近にブドウが植えられていましたが、明治末頃には奈良の苗木商から新しい品種の苗木を購入して栽培が本格化し、さらに、第一次世界大戦の好景気でブドウの需要が増大すると、林野を切り開いてブドウ畑が造成され、全国有数の生産地となりました。

人口の増大に伴い、古市村が大正 5 年に町制を施行しました。同 12 年には、大阪鉄道の道明寺～阿部野橋間（現在の近鉄南大阪線）が開通し、大阪市内と短時間で結ばれるようになりました。また、この頃から白鳥園や恵我之荘の住宅地が開発されて、大阪のベッドタウンとしての基礎を築いていくようになりました。また、「駒ヶ谷のブドウ狩り」・「大塚山の桃の花」などを楽しむ人や「極東キネマ白鳥撮影所」を見学する人が多く訪れるようになりました。

昭和 30 年には、高鷲村も町制を施行し、そして昭和 31 年には、古市・高鷲・丹比・埴生・西浦・駒ヶ谷の 2 町 4 村が合併して南大阪町が誕生しました。昭和 34 年 1 月 15 日に市制施行し、日本武尊の白鳥伝説に基づいて、市名を「羽曳野」としました。当時の人口は約 3.5 万人でしたが、その後、大阪のベッドタウンとして人口が急増しました。本市域は、その利便性と環境の良さから、高度経済成長期には羽曳野丘陵一体が住宅地として開発され、その後も大小の宅地開発が進み現在の市街地が形成されました。



大庄屋の家・吉村家住宅



剣先舟（出典：羽曳野市史第 2 巻）



ブドウ畑



白鳥園住宅



恵我之荘住宅

② 文化（祭礼・行事、生業など）

祭礼・行事

年間多くの催事が催されますが、ひととき賑わいを見せるのは「だんじり祭り」です。羽曳野市のだんじりの歴史は古く、なかでも、応神天皇を主祭神とし、日本最古の八幡宮といわれる誉田八幡宮のだんじり祭りについては、「河内名所図会」（1801年）には「誉田の楽車（だんじり）は古風にして外の囃子とは違ふ也これだんじりの始まり也とぞ」、「摂津名所図会」（1778年）には「楽車は旧河内国誉田祭りよりはじまりて」とあり、「藤花車」（羽曳野市指定有形文化財）の舞台裏面には、「従天和二壬戌年、再造至文久二壬戌年迄百八十三歳引成候」（1682～1862年頃）などの墨書銘もみられます。

現在、だんじりを保有している地域は数多く、市内全域で17台におよびます。だんじりの4つの独楽（コマ）を地面に着地させたままクルクルと回す「ぶんまわし」は地域独特の文化でもあります。また、白鳥神社に宮入する古市六町と軽羽迦神社に宮入する軽里の計7町では、2010年に青年団員で構成された「羽曳野青年団協議会」が発足し、祭り以外の活動（清掃、募金、歳末夜警などのボランティア活動）により、「地域」「世代」の交流を深め、だんじりをより深く愛してもらおうための活動も行っています。



伝統儀式のお渡り

だんじりを保有している町会と宮入神社

宮入神社	町会
白鳥神社	古市北町
	古市南町
	古市西町
	古市東町
	古市中町
	堂之内
軽羽迦神社	軽里
日吉神社（西浦地内）	西浦
日吉神社（野地内）	野
丹比神社（堺市美原区）	
誉田八幡宮	馬場町
	西之口
	鍛冶町
	王水町
大津神社	東大塚
八王神社	櫻山
羽曳が丘神社	羽曳が丘だんじり会
美貝久留御魂神社（富田林市）	尺度



河内名所図会（誉田例祭車楽）

だんじり祭り以外でも、各神社や寺院を中心に、様々な祭礼・行事が催されています。誉田八幡宮では、塵地螺鈿金銅装神輿（国宝）が応神天皇陵古墳へ渡御する「お渡り」（年に一度応神天皇の魂を応神天皇陵に帰す神事）などの伝統儀式も継承されています。また、白鳥神社や日吉神社の伊勢大神楽の奉納、壺井八幡宮の例大祭や弓馬術礼法小笠原教場奉納行事、茅の輪神事、大津神社の茅の輪くぐりなどの多くの祭礼・行事が催されます。また、聖徳太子と蘇我馬子の建立と伝えられ「中の太子」と呼ばれる野中寺では、光明会（光明真言を唱えて秘法を修し死者の冥福を祈る法会）などが江戸時代から続いています。

また、近年では白鳥伝説にちなんだ市民まつりの市民フェスティバル白鳥伝説「はびきの祭」も催されています。

生業

江戸期から明治期にかけて新田開発をはじめとする農業基盤整備が行われ、明治中頃になると、米、綿のほか、さつまいも、南瓜、そらまめ、えんどう、お茶、梅、桃などの栽培が盛んとなり、大阪市内へ出荷されていました。

明治末期から大正にかけて、ブドウ栽培も行われるようになり、東部の駒ヶ谷地区は、ブドウの産地として全国的に有名で、急勾配の丘には、見渡す限りのブドウ園が広がっています。また、大正期からは、イチジクの栽培も本格化し、府下でも最大のイチジクの出荷量を誇っており、羽曳野市観光協会では、イチジクを使ったイチジクジャムも販売しています。また、近年は、食肉加工やワイン醸造も羽曳野市の主要な地域産業となっています。



塵地螺鈿金銅装神輿（国宝）



河内ブドウ（デラウェア種）



イチジク

(2) 自然

羽曳野市は、生駒、信貴、金剛、葛城山系に囲まれた河内平野の中にあり、東部には二上山西麓、龍王寺山塊、中央部には石川河内平野、羽曳野丘陵、西部には狭山扇状地が広がっています。本市の東方に稜線を張る二上山は、北の雄岳、南の雌岳の双峰からなる特徴ある眺望景観を形成しており、その西麓の豊かな自然環境は市民にとって憩いとレクリエーションに重要なものとなっています。

二上山に連なる寺山(294m)、鉢伏山(211m)は、標高が300m以下で里山の特徴を示し、その西に続く玉手山丘陵は、標高が80m前後で、古墳の築造による地形改変が特に著しい区域です。飛鳥川左岸の東南から西北にのびる五字ヶ峰丘陵は、東南端の標高が100m余りで、北に向かって徐々に高度を下げています。これらに対して、石川左岸(西岸)の羽曳野丘陵は規模が大きく、市域での標高は90m余りで、同じく北に向かって高度を下げています。羽曳野丘陵上の分水界は東よりにあるため、ほとんどの谷は西北に向けて刻まれています。

主な河川は、中央東部を石川が北流し、その東を支流の飛鳥川が流れ、北部で合流するほか、西部を狭山池(大阪狭山市)から発する東除川が北流しています。それらの流れは大和川に合流した後、大阪湾に注いでいます。市域はこれらの水系により大きく石川の右岸(東岸)地域と左岸(西岸)地域とに分けられます。

石川右岸(東岸)地域は、石川の氾濫原、支流の飛鳥川の河谷平野、飛鳥川によって南と北とに分けられた丘陵地、葛城山の西斜面などからなっています。石川左岸(西岸)地域は、羽曳野丘陵の背骨を南北に通じる分水界により、石川流域と東除川流域とに分けられます。この分水界から東の石川に向けて、高位・中位・低位の各段丘をつくって段階的に下がっていき、水田耕作の歴史が古い肥沃な沖積平野を経て氾濫原に至ります。応神天皇陵古墳のような巨大古墳が築造されたのは、低位段丘を主とし、中位段丘や沖積平野となっています。

石川や飛鳥川の水辺空間では整備が進められ、石川河川公園(都市計画公園)は「大阪府緑の基本計画」の「みどりの将来像」では、骨格となる緑として位置づけられており、多くの市民・府民の憩いの場となっています。また、市域には、かんがいを目的としたため池が数多く点在しています。

羽曳野市の植生は、古くから人が居住し、森を拓いて田畑とし、また土器を焼いたり燃料としたため、元々の森林は伐採されています。東端部の寺山付近にアカマツ林が残っていますが、これは、繰り返し伐採を受けた結果と考えられています。大阪府内では多くみられるクヌギ、コ



羽曳野丘陵と南阪奈道路・市街地の広がり



峰塚公園からの二上山地の山並み



農地の広がり と 遠方の山並み (通法寺地区)



石川の風景



飛鳥川の風景



ため池の風景

ナラなどが優先する雑木林の面積は少なく、南部の丘陵地は住宅地となり、石川以東の西及び南向き斜面の大部分はブドウ畑となっています。以前は、アカマツ林であったと考えられており、羽曳が丘周辺にもその断片がみられます。

平地では、古くから開発されたため、ほとんどが田畑や市街地となり、緑地は少なくなっていますが、歴史遺産の1つである応神天皇陵古墳などの古市古墳群は、市内の中部を中心に多数点在しており、緑に覆われた墳丘が独特の歴史的市街地景観を形成するとともに、市街地における環境保全機能としての役割も果たしています。また、市内には多くの社寺がありますが、まとまった社寺林をもつものは少なく、野中寺、杜本神社、壺井八幡宮、大津神社、白鳥神社、誉田八幡宮の6箇所があげられます。

また、「壺井八幡宮のクス」や「野中寺のサザンカ」（いずれも大阪府天然記念物）や、都市の美観風致を維持するための樹木の保存に関する法律（羽曳野市環境美化条例第75条第1項）に基づく保存樹（10本）などの巨樹・巨木もみられ、市街地の景観を特徴づけています。



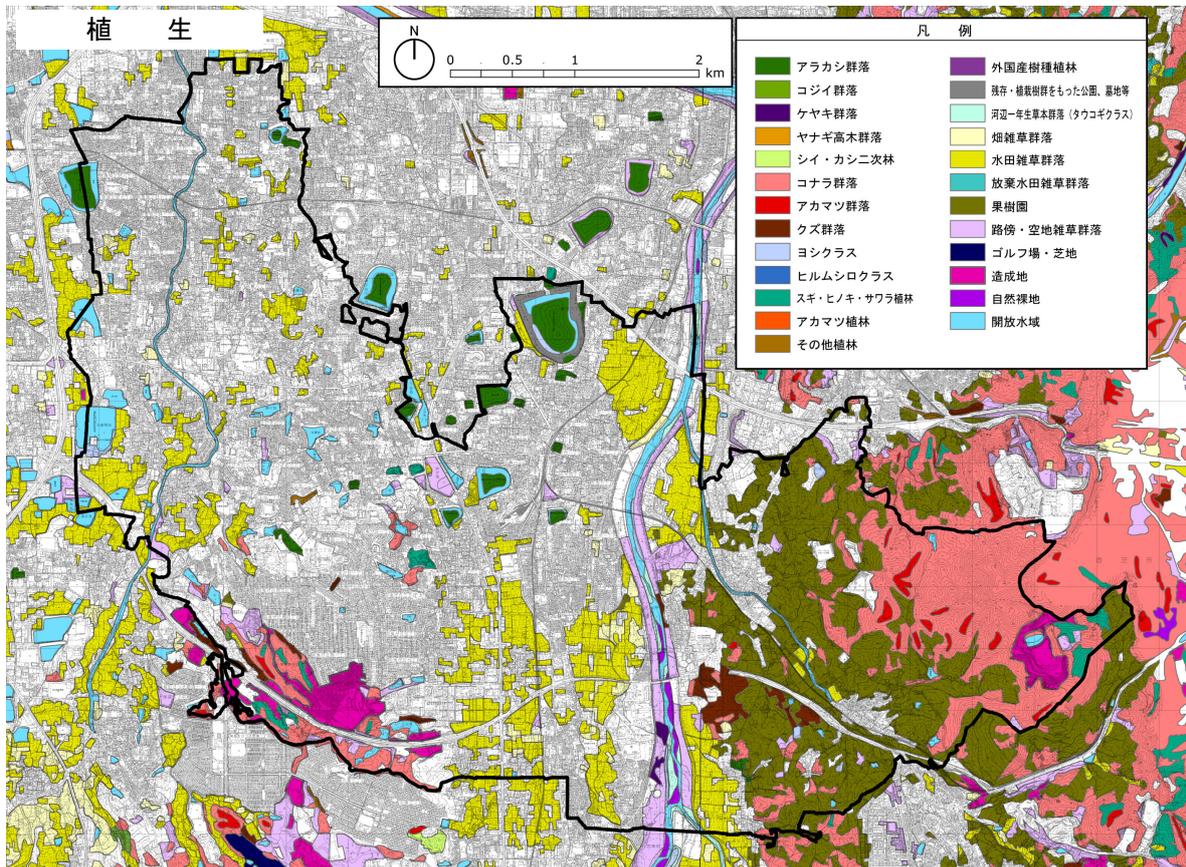
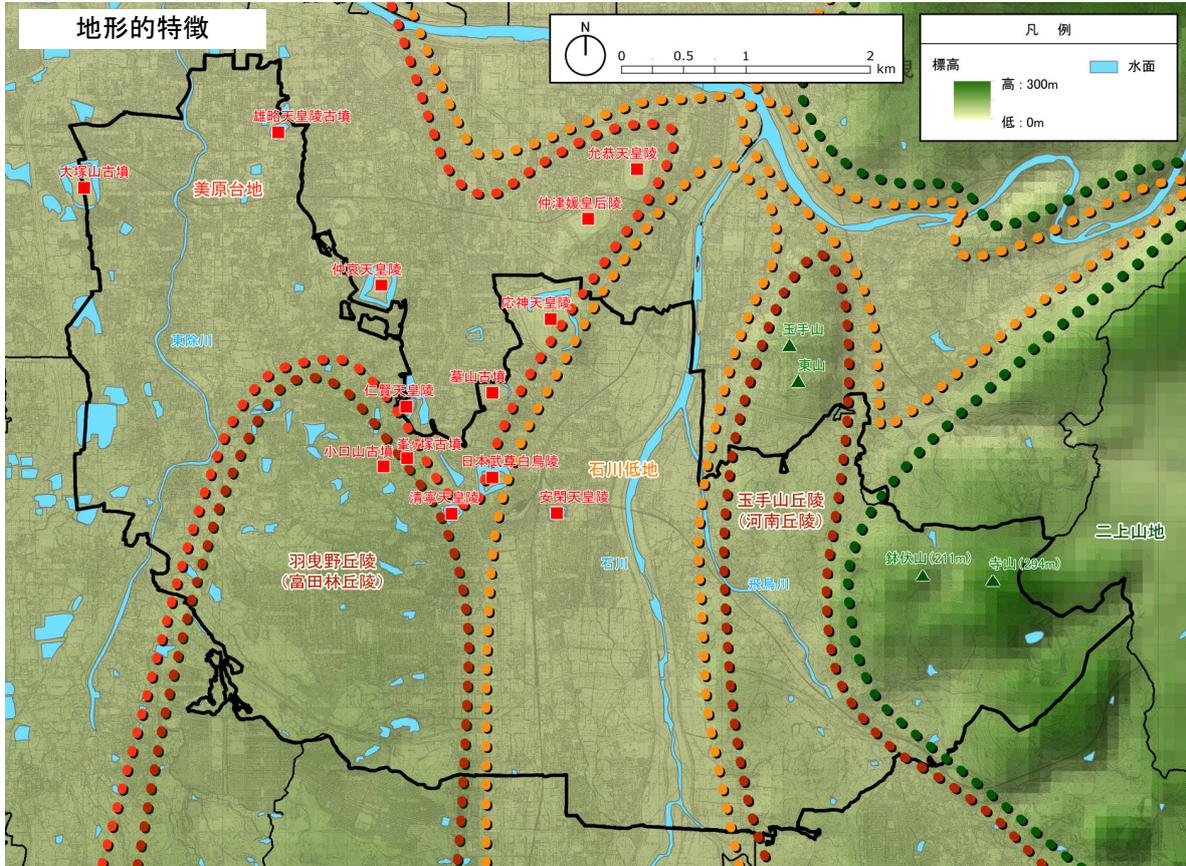
壺井八幡宮のクス（府指定天然記念物）



野中寺のサザンカ（府指定天然記念物）



グレープヒルスポーツ公園付近より西方向を望む



(3) 都市・市街地

都市化・市街化の状況は、地域ごとに、次のように整理できます。

古市地域

古市駅周辺に小売商業機能が集中し、市役所周辺では羽曳野警察署や羽曳野簡易裁判所といった公共施設が集中する等、本市の中心的な機能を有しています。北部には、全国で2番目の大きさとなる応神天皇陵古墳など多数の古墳が所在する地域となっているほか、石川が地域東部を北流しており、石川沿岸の豊かな緑地と、周辺に広がる市街化調整区域の農地が、市街地周辺に良好な環境をもたらしています。



古市駅前通り

高鷺地域

恵我ノ荘駅及び高鷺駅前に商店街があり、その周辺部は戦後の急激な市街化の進展により形成された住宅地が広く連たんしています。まとまりのある農地は、非常に少なくなっています。



恵我ノ荘駅前商店街

丹比地域

狭山池に端を発する東除川が北流し、樫山や郡戸、河原城北部あたりには市街化区域内農地がまとまって残っています。丹比地域と接する堺市美原区も境界付近は市街化調整区域で農地が広がっており、丹比地域は農地に囲まれた住宅地となっています。また、工業系の土地利用も多く、沿道商業施設をはじめ運送業や板金工場等が立地しています。



農地と住宅系・工業系土地利用

埴生地域

高鷺駅、古市駅からほぼ等距離に位置し、南部には四天王寺大学・短期大学部、四天王寺羽曳丘高等学校や大阪府立大学羽曳野キャンパス、大阪府立呼吸器・アレルギー医療センター、大阪府立羽曳野支援学校等の広域的な教育・医療機関が立地し、北部は住宅地が広がります。特に野々上地区は、近鉄藤井寺駅への交通至便な地区で本市有数の人口集中地区です。また、地域の中部に住宅地に囲まれたため池が多く存在し、北部では市街化区域内農地がまとまって残り、水と緑の自然景観要素が多く存在する地域ともいえます。



大阪府立大学

羽曳が丘地域

計画的に開発された戸建て住宅を中心とする低層住宅地としての土地利用が大部分を占めており、南阪奈道路と住宅地の間の一部において自然環境が残る区域がみられます。



羽曳が丘地区の住宅地

西浦地域

羽曳野市の南端に位置し、羽曳が丘地域と駒ヶ谷地域に挟まれた地域で、市街化調整区域面積が過半を占め、市街化区域は北西部の住宅地と南東部の住工地に分かれています。地域の南西部では、農業大学校を併設した大阪府立食とみどり技術センターが立地しており、その南側にはため池と丘陵地が広がっています。北西部は、住居系中心の地区ですが、南東部の石川河川公園に面した位置に大規模工場や娯楽施設が立地しています。



石川沿川の大規模な工場

駒ヶ谷地域

駒ヶ谷地域は、市東部の石川右岸にあり、北部に柏原市域と連なる柏原・羽曳野中小企業団地が立地しています。山林やブドウ畑等の農地が広がり、駒ヶ谷、飛鳥等いくつかの集落地が点在する農村地域となっています。二上山西麓の山林は、金剛生駒紀泉国定公園に指定され、その裾野の丘陵部に広がるブドウ畑とともに、緑豊かな市の原風景を形成する地域となっています。



地域北部の工場等

